

くら感謝しても足りないほどである。

ただし、博士後期課程の後半に入って出版した論文の数々を博士論文にまとめていく際には、かなり苦労したというのが正直なところである。私の場合、博士論文審査セミナーに二度落第しており、さらに合格後も原稿の全面的な書き直しを二度行った。また、2012年9月に博士後期課程を満期退学し、さらに2013年3月に学振研究員の採用期限が切れたため、非常勤講師業で生活をしていく必要があった。2013年からの2年間は、非常勤講師で日々の糧を得つつ、いつ終わるかも分からない博士論文を修正し続ける毎日であった。このような生活もあと一、二年と続かないだろうから、そろそろ別の道も考えなければならぬとも考えていた。だが、2014年後半に現在の勤務校への着任と博士号の取得が立て続けに決まり、このような心配は杞憂に終わることになった。本年4月からは忙しくも充実した日々を過ごしている。しかし、これも私の一人の力というよりは様々な人々の支えによるところが大きい。

もし自分自身の反省もこめて私から後輩の院生諸氏にアドバイスをするとしたら、以下のようなことが挙げられるかもしれない。①学会誌の査読付き論文を一本でも多く書くこと、②非常勤講師として積極的に教育経験を積むこと、③博士号を可能な限り早期に取得すること、④計量分析の手法はできれば使えるようになっておくこと、⑤チャンスがあれば英語の研究業績も作っておくこと。私自身の体験にもとづく感覚に過ぎないのだが、上記の①～⑤がこの世界での「生き残り確率」を高めていく上でじわりじわりと後から効いてくるように感じている。ただし、博士後期課程の院生が独力でこれらのことが達成できるとはなかなか思えないので、講座全体の体制として（また、私たち修了生も含めて）より積極的にバックアップしていくことは必要ではないかと思う。最後に、私はお世辞にもよい手本とは言えないのであまり参考にならなかったかもしれないが、博士後期課程の院生の方々に私の拙い文章が何かしらの形でお役に立てれば幸いである。

博士論文をふりかえって

国立民族学博物館外来研究員／名古屋大学大学院研究員
前島訓子

私は、博士論文「遺跡から『聖地』へ：インド・ブッダガヤにおける『聖地』再建のダイナミクス」を提出し、2015年3月に博士号（社会学）を取得しました。

私がインド・ブッダガヤを研究しようと心に決めたのは大学生の頃です（その当時、自分が博士論文を書くとは想像もしていなかったことですが）。ブッダガヤは、仏教最大の聖地として日本でも知られた地です。2001年に初めてブッダガヤを訪れてから、同地域の歴史的遺跡が2002年に世界遺産に登録され、その後、訪れる世界各国、地域の仏教徒や観光

客の数も次第に増加し、特に遺跡の周囲に次々と建てられていく国や地域、宗派の異なる仏教寺院には目を見張るものがありました。このインド・ブッダガヤを研究するために、大学卒業後、名古屋大学での1年の研究生期間を経て、大学院に進学し、今日に至ります。その間、私とブッダガヤとの関わりも、かれこれ10年を超えることになりました。

博士論文を形にするまでをふりかえってみると、これまでに至る年月は、一言では言い表し難いものがあります。ここでは、博士論文をまとめる段階において、何が問題として横たわり、何が突破口となり論文がまとめられたのかをふりかえりたいと思います。

私が最初にブッダガヤを訪れ、関心を持ったのは、リトルワールドさながらの世界各地の寺院建造物が林立し、衣装や巡礼形態の異なる仏教徒や仏教僧がこの地に会し、各々の仕方で祈りを捧げるその光景と、そこに群がる地元の観光業者らの関係性、そして、年々、姿を変えつつあるブッダガヤの「聖地」と「観光地」を揺れ動く様でした。中でも、私の関心は、「仏教聖地」とされているにも関わらず、生活者の大半がヒンドゥー教徒やイスラーム教徒であるブッダガヤの「社会」でした。仏教改宗集落の全戸調査や、ブッダガヤ一帯の集落を歩き、質問紙を作成し、それを手に各集落の状況や人々の様子を見聞きして回り、情報や資料を集め、また時に仏教寺院を訪ね歩き、時に毎朝夕、遺跡に通い、人々を観察する等、言ってみれば、ブッダガヤの地域の歴史そして人々の生活史の掘り起こしを行うような作業を行っていました。

実は、こうした、当初から抱いていたブッダガヤ社会や地元の人々への関心が、博士論文の最終段階に差し掛かる時から非常に重要な意味を持っていることが改めてわかりました。

博士論文の成果について触れておくと、ブッダガヤが「仏教聖地」以外の何ものでもないかのように取り上げる研究が多い中で、博論では、遺跡およびその周辺をめぐる実に多様な人々の関わりがあり、思惑や利害の異なる諸主体が「聖地」を築き上げていこうとする「聖地」再建のダイナミクスの過程を見出したことにあります。中でも、その過程とブッダガヤ社会とその変化の結びつきを示した点は、生活者の大半がヒンドゥー教徒やイスラーム教徒であるにも関わらず、その社会に注目した研究の蓄積が少ないということから見ても、特徴的であると言えるでしょう。もちろん、博士論文の大きな方向性、つまり、ブッダガヤが遺跡を中心に「聖地」として築き上げられ、またその過程が決して単純ではないという博士論文の大筋は、すでに修士論文において示していたものではありません。

しかし、修士論文の段階では、ブッダガヤ社会の構造やその変化を論じることが、「仏教聖地」あるいはその再建過程のどこを、どう論じており、両者がどのように有機的に結びついているのか、という課題に答えることができず、この関係を確かなものとして論じるまでにはかなりの時間がかかりました。ブッダガヤの地域社会やそのあり方が鍵となり、独特の「聖地」のあり方を形づくっていることに見当が付いていなかったわけではありません。ですがこの時点では、例えば、地域社会の変容を特徴づける仏教改宗者の集落や、この地域に日本語話者や観光業の展開、さらに遺跡をめぐる宗教的緊張、世界遺産

をめぐる住民の反対運動等、地域社会で生じている様々な現象を、それぞれ追いかけているだけで、各々の関連性もあまり意識してはいなかったと言えます。

さらに、最後の最後まで頭を悩ませていたのは、これらの地域社会で生じている現象が「仏教聖地」再建の過程で生じた単なる付随的な出来事に過ぎないのか否か、という疑問と違和感です。

博士論文が大きく進んだのは、まさに、これらの問題に対する私なりの答えが見つかったからだと言えます。その答えとは、私がこれまでみてきた地域社会の変容が「聖地」再建に付随的な現象なのではなく、簡単に言えば、「聖地」再建に積極的に関わっていくようになる過程だということに気づいたという事です。もっと言えば、ブッダガヤの生活者自身が「聖地」再建を担う当事者（主体）へと変貌していくプロセスであり、地域において登場した主体は一枚岩ではなく、カーストや宗教の相違によって異なり、それぞれの「仏教聖地」への関わり方もまた異なっているという点に気がついたからです。こうした悩みをの過程を経て、博士論文において「聖地」再建の過程が、「仏教聖地」という「場所」の生成過程のダイナミクスとして示すことにつながりました。

私の研究生活は決して平坦ではありませんでした。論文がなかなか掲載にいたらず、業績を出すまでに時間がかかりました。先の見えない研究課題に向き合っていくのは、不安との戦いでもありました。その意味で、博士論文は、私にとって汗と涙の結晶だといっても過言ではありません。長きに渡りインド・ブッダガヤと関わり、そしてこうして博士論文として形にすることができたのは、言うまでもなく、両親や家族に見守っていただき、そして先生方や大学院の仲間に、励まされ、支えられ、さらにブッダガヤの人々の協力があったからに他なりません。名古屋大学での在籍期間のリミットが迫るなか、地域社会学会で学会賞をいただき、国立民族学博物館の外来研究員として受け入れていただけたことは、研究をする上で大きな励みとなりました。

これまでの研究を通じて他領域の研究者との接点も広がりました。聖地と観光の研究をする研究者との出会いから、ロシア、中国、インドの地域大国を比較する研究する若手研究者との関係へと広がり、聖地の比較研究を行うまでになっています。そして今、イスラム地域の考古学研究者との共同研究にまで広がっています。

改めまして、これまでの研究の指導をいただきました先生方、研究生活をともに過ごした友人、そして研究を応援してくれた両親や家族に、この場を借りて御礼申し上げます。

私の博論で取り組んだ課題は、これで終わったわけではありません。ブッダガヤは今もなお、動き続けています。そこには、社会学として取り組むべきたくさんの課題が隠されているに違いありません。今後、その一つ一つを紐解いていくと同時に、さらに新しい課題に出会うことを楽しみにしております。